



東九州支部報



横岳山頂にて喜寿のお祝い(5月28日)

喜寿とは数え年七七歳のことで、喜の略字が七十七と読めることから「喜寿」と呼ぶようになった。それを祝うことを「喜の祝い」「喜の字の祝い」「喜の字の歳(よわい)」というのである。祝いは基本的には還暦と同じだそうである。ちなみに色は還暦は赤だが喜寿は古希と同じ紫とのこと。

というので、五月の月例山行はめでたく今年喜寿を迎えられた会員の、安藤幹さんと茅野亨生さんのお祝い登山会である。五月二十八日、大分出発組はサニーを午前5時に出て、木浦での集合時刻は七時半の予定である。木浦中学校前で待ち合わせ、集まった車一〇台、計二十一名がそろって出発。行き先は喜寿にちなんで七七の数字にこだわった横岳(七七二・一m)である。木浦から藤河内に通じる車道を上り、「千人間府」(せんにんまふ)を過ぎ、大切峠の手前のヘアピンカーブの先の道路脇に縦列駐車。

車道からすぐ横の法面のコンクリート吹きつけを踏みながら、稜線にとりついて登っていく。小さなアップダウンのあと、少し急な稜線を一気に登っていくと、車道から約二十分で横岳山頂である。

小さな静かな山頂は、時ならぬおおぜいの登山者の訪れで大にぎわい。まずは西事務局長から二人にお祝いの言葉。そして参加者全員が自己紹介をかねてお祝いのスピーチ。二人の主賓からお礼の言葉。続いてみんなで祝杯である。安藤さんの持参のスパリングワイン、茅野さんの持参の缶ビールがドライブバー以外の参加者にはふるまわれて、加藤さんのハーマニカ演奏

横岳(七七二・一m)で喜寿のお祝い 安藤さん・茅野さんおめでとう

(五月月例山行報告)

《 も く じ 》

| | |
|----------------|---|
| 喜寿のお祝い登山 | 1 |
| 釈迦岳・御前岳 | 3 |
| 三子山・安蔵寺山 | 4 |
| 私の無名山ガイドブック 26 | 5 |
| 今西錦司⑦ | 6 |
| お知らせ | 7 |
| 後記 | 7 |
| 平成17年度会計決算報告書 | 8 |
| 平成17年度会計監査報告 | 8 |

も披露され、山頂はしばし賑やかな宴会の場となる。そして、恒例の山頂での万歳三唱はお二人の喜寿を祝って。さらに、会員の木山さんの達筆で書かれた、二人の喜寿を祝う横断幕を掲げて記念撮影。



安藤さんの横にはいつもおしどりのようにびったりと寄り添うセツ夫人。そして本来なら同じように横にびったりと寄り添っているはずの久子夫人には、四年前に先立たれたが、今は気を取り戻して伸びやかに生きている茅野さんの闊達な姿。二人の姿を見ていて、自分は喜寿まで山を歩いていられるだろうか？とふと思う。もちろんその歳まで永らえておられることだが・・・とまれ、賑やかな山

頂の祝賀パーティは終わりに。忙しい仕事の中でも山に対する愛情を忘れずに過ごし、今も元気に山を愛し続ける安藤さん。ふるさとの山をこよなく愛し続け、地域の山と文化の先達者として今もがんばり続ける茅野さん。二人の元気な姿がきらめいていた横岳山頂であった。

下山の後は、次の山に移動途中にちよつと観光？・・・を。木浦と藤河内を結ぶ古い峠道は、天神原山の肩を通っているが、その尾越の手前の道脇にある『女郎の墓』へ立ち寄ることに。木立の中に川石を並べただけのお墓である。華やかな繁栄の時があったであろう木浦鉾山にも、その陰にはうらがなしい女の生き様があったことをしのばせて、しばし山屋たちの心を湿らせる・・・。

西にちなんで鷹鳥屋山へ

その日二番目の山は、今年のも月例山行のテーマ『十二支の山に登ろう』で西年にちなんで鷹鳥屋山(三ツ三)へ。一旦藤河内まで下って真弓へと車を走らせ、ここから舗装された参道を登って神社の駐車場へ着く。鳥居をくぐり参道に入るとシイ、カシ、スギ、モミ、イヌなどの大木の鬱蒼とした森の中である。

この鷹鳥屋山の山頂付近に残された自然林は、鷹鳥屋神社の

境内林(国有林も一部含む)で、県の天然記念物に指定されている。石段を上がりまず神社に参拝する。そして社の横手から山道を登っていく。素晴らしい林の中を一〇分あまりの登りで山頂である。



(鷹鳥屋山にて)

三等三角点のある山頂は以前は木立に囲まれていて、少し南に下がった岩場の上に出なければ展望はなかったが、最近、南側が大きく伐り開かれて、すっかり明るい山頂になっている。目の前には桑原山がその高い大きな山体を見せて、まるで覆い被さるように迫っている。

ここで今日二回目の恒例の山頂万歳三唱を、西さんの主唱でときの声をあげ、時刻はまだ少

し早い昼食となる。あちこちに陣取ってめいめい弁当を開く者、ビールのプルを引く者と、しばし賑やかな山頂である。

もうひとつ山は鳥岳

駐車場下って、ここで帰宅する組と、時刻がまだ早いのもうひとつ山登る組とに分かれる。もうひとつ山組は、帰る途中のさほど遠くないところにある、これも西年にちなんだ鳥岳(三三三)へ。

北川ダムにかかる青い時間橋を渡り、旧国道の峠を越えて田原の里の手前から。林道に入って上っていくと小さな峠に着く。峠の北側には小広場があり「宇目町中央地点之碑」と書かれた大きな石碑がある。鳥岳へは、その反対側にのびる尾根を登るルートがある。

尾根の西側は伐採後の植林地で、芝のブッシュ。東側はリョウブやネジキ、ダンコウバイ、ヒシヤカキなどの中低木の二次林である。植生境のわずかにそれと分かる踏み跡を頼りに登っていく。一旦緩くなった登りがふたたび急になり、両側がすべて二次林となつて、その中の細かい踏み跡を直登すると、東西に延びた平らな稜線に出た、と思つたらそこが山頂だった。峠から三五分ほどである。

三等三角点があり、南西方向

に傾斜を持ちながら広がりを持つ広い山頂の、北の端が最高地点である。



(鳥岳にて)

周りの中低木の二次林で、木々の梢越しにさつき登つた鷹鳥屋山や板戸山など、宇目町南部の山が連なつて見える。今日三回目の山頂行事の万歳は遠江さんの主唱で。そして小休憩の後、峠へと下山。一日に三座登って、五月の月例山行はこれで終了。

(報告 飯田勝之)

横岳参加者：安藤(幹、セツ)、茅野、阿南、安部、飯田、石川、甲斐夫妻、加藤、岐部。後藤、佐藤(秀)、佐藤(正)、園田、遠江、得丸、中野、西、渡部

釈迦岳・御前岳(権現岳)

マンサクの花をたずねて

(四月月例山行報告)

阿南 寿 範

四月に入り一気に春の陽気に変わると思ったが、このところ二三日おきに雨模様が続く、土曜日は一日雨であった。日曜日の予報は久しぶりに晴れと言うことで期待して起きた。自分で確認するまでは心配であったが、どうにか天気予報通りになりそうだ。

昨夜は、平成一八年度のJAC東九州支部の総会であった。予定では総会を終わり次第、月例山行に出発する予定であったが、雨で参加者も出発する気配はない。話し合いの結果、早朝出発することに決定した。「サニースポーツを五時出発」と決定した。

私の車には園田会員と、私の上司である秦が乗る予定である。私の勤め先の会社の駐車場待ち合わせることにになり、二人を迎えに行った。二人は近所に住んでいるため一台に乗り合わせですでに駐車場待っていてくれた。荷物を私の車に移し、丁

度五時に出発した。車はスペース的には、申し分ないのであるが、肝心な燃料の方が少なくてメーターゲージが四分の程度の位置である。

「途中でエンストを起こしたらどうしよう」でも後一〇〇百程度は走るのではないか、ガソリンスタンドを探しながら大分インターへ向かう。しかし市内のガソリンスタンドは、早朝の日曜日ともあって、どこもクローズ。仕方なく高速道へゲートインし走らせる。

夜がなければ何処か開く店があるのではないかと思いつつ、薄暗い高速道路を走る。九重インターで高速を下り、国道二一〇号線を天瀬町まで走る。田舎に行くほど、どこもスタンドは閉まっている。不安が増す。とうとう分岐点(天瀬より大山町へ抜ける予定)まで来たが開いていない。このまま夜が明け、ガソリンスタンドの開くのを待つか、日田市街まで行くのか決断である。

コンビニで情報を確認すると店員曰く「日田市街地まで行けば何処か開いている可能性がある」とのこと。そのまま日田市へ向かうことにする。やがて日田市内に入る、でもどこも閉まっている。

助手席に座っていた園田さんが急にポケットから携帯電話を取り出し、確認してくれた。その情報によると駅前のコスモ石

油が開いているとのこと。さっそくコスモ石油を探す。見つけた。そこはセルフの給油を提供してくれるのは誰だったのかと後で思う。

ガソリンを満タンするとあとは安心。大山町から前津江村へと向かう。道路はダムによって水没するため、今急ピッチで付替道路が建設されている。昨年来たときは河川を横断する道路は高架橋の下を横断していたが今回は、立派な高架橋が完成している。

およそ一〇分程度で今日待合せの場所、前津江役場に到着した。すでに二台の車が着いていた。飯田車、中野車である。それぞれ車には、四名の会員が乗っており、合わせて今日の山行は七名となった。

今日の目的地は御前岳(権現岳)。奥日田スーパールンドの椿ヶ鼻まで行き、そこから林道を走って、福岡県側から登るルートはを登ろうということになり、先へ進むがハイランドパーク横の林道は通行止めである。椿ヶ鼻までもどり、再検討の結果、釈迦岳より御前岳へ縦走し御前谷を下ることとなった。

このため、椿ヶ鼻から一台に五人乗って釈迦岳の頂上へ向かい、私の車と飯田さんの車は田代の登山口に向かう。登山口に私の車をおいて飯田車に私の荷物を移し、来た道を釈迦岳山頂の駐車場に向かう。

七時半過ぎに釈迦岳山頂駐車場に着いた。車から降りると天気は晴れて、雨の心配は全くない。しかし、風が強く少し肌寒い。先に着いていた四名はすでに出発し、三角点山頂の方に着いているようで、向こうから声が聞こえてくる。園田さんだけが私たちを待ってくれていた。

準備を整えて七時五〇分に出発。両脇クマザサの中を約一〇分を歩くと三角点(2229.5m)に着く。(昔は、この一等三角点はこのよりも高く(230.8m)、一〇〇mほど大分県側に入った山頂の、広い木立の中にあつたが、その後建設省のアンテナ施設が造られて、三角点は県境のこの岩峰に移された。それまでは福岡県の最高峰は御前岳と位置づけられていた)

飯田さんがそれを見て「ウスヒラタケだ」という。食べられるきのこだそうだ。買い物袋いっぱい採取した。園田さんがきのこのクラブの話をし一緒に採って採っていた。「きのこは、山に行つた際時々見かけるが、見極めが難しく毒きのこをよく間違えて食べて死んだ話を良く聞く」という話を聞き少しびくつく。しかし、大収穫で二人は満足である。



(釈迦岳にて)

頂上には釈迦の座像があり、これからの安全を祈願しお参りし、全員そろって記念撮影したあと、御前岳へと向かう。(八時二〇分)

釈迦岳からの下りはとても急である。所々に補助ロープがある。下り終わると平坦なコースとなる。本日のコースの花は「マンサク」である。マンサクの花をさがしてながら平坦なコースを進む途中、二〇分位進んだところで、先行す女性軍たちから「キノコがある」と声がする。

園田さんがそれを見て「ウスヒラタケだ」という。食べられるきのこだそうだ。買い物袋いっぱい採取した。園田さんがきのこのクラブの話をし一緒に採って採っていた。「きのこは、山に行つた際時々見かけるが、見極めが難しく毒きのこをよく間違えて食べて死んだ話を良く聞く」という話を聞き少しびくつく。しかし、大収穫で二人は満足である。

見えるはずの、稜線左側は福岡県、右側は大分県、ガスの動きが激しく時々ガスの切れ間から四方の山々があたたまをのぞかせてくれる。軽い汗をかきながら、釈迦岳から一時間ちよつとで、御前岳(2209m)へ着く。山頂には、「景行天皇巡幸御遺跡」と刻まれた石塔がある。北は豊前の英彦山から筑前の馬見・古処山が連なり、西には筑後の耳取納連山、さらに肥前が多

良山系、南は肥後の阿蘇山、東は、豊後の久重山群から万年山など、連なる山々が流れる霧の晴れ間に時々現れる山容は、我々の想像をかきたてる。



(御前岳にて)

無事御前岳登頂を記念して、本日参加の秦さんが紹介される「今西流万歳」を西さんより伝授して三回ほど繰り返す。最後に西さんが「今西先生・・・ヤッホー・・・二度と来ません」で締めくくり、下山を開始する。(九時四五分)

二分ほど下ると、縦走路から田代集落へ下る道が分かれていく。ササの葉をかき分けながら約三〇分ほど下ると、カエデ、ブナ、シオジ等林立する谷合いに出る。とても、静かな林である。下るほど林相が良くなり、

杉の巨木なども出現する。途中、「田代岩屋」に立ち寄る。そこには大きな岩屋があり、ちいさい祠もある、岩の中は、雨露しのげる場所になっている。道はここまで、下山道は少し引き返さず大杉の間から谷底の方へ下る。

この辺りは倒木で登山道がわかりにくくなっているが、少し歩くと登山道が現れ下る。約二〇分ほど下ると谷が二股に分かれて右側の沢を少し登ると、谷間の数カ所から湧水がわき出しており、水量も豊富で「豊の国名水一五選」の一つに指定されているそうである。

今回の山行は朝早めに行動したため、みんなおなかもすき、時計はまだ一時少し前だが、そこから少し下ったところで昼食とする。三〇分ほどの休憩で、おなかも満たして再出発。道が広くなつて、やがてスーパードアの登山口に着く。(一一時四〇分)

朝車を置いたときは、私の車一台だけであったが、ログハウスの前には二台増えていた。ここから全員、私の車へ乗り込み樺ヶ鼻の風力発電塔まで行く。半分の人をおろし、運転手を乗せて朝出発した釈迦山頂に車を取りに行く。

天気は段々良くなり、もったいないよう天気になる。樺ヶ鼻に下り、待っている人達と合流し、今日はこの時点で解散とな

った。定期的に遅すぎたのか、今回の山行の目的の花「マンサク」にお目にかからなかったものの、稜線で収穫した「きのこ」を肴に一杯だ!

参加者：阿南、飯田、秦、園田、中野、西、牧野

三子山、 安蔵寺山

(六月月例登山報告)

佐藤 正八

今年の月例山行のテーマ『二支にちなんだ山に登ろう』で、その二回目の今月は『子年』にちなんで島根県の三子山。梅雨に入ったが前線が上がりきれずに、おかげで土、日は晴れてくれた。予定を一時間早めて、午前四時にサニーを出発。中国自動車道六日市IC、大分より四時間で高速を下りた。日本海に注ぐ高津川の上流、古賀川に沿って国道一八七号線を北上。津和野町の日原(にちはら)から国道と分かれ、桐長峠を越えて倉谷川沿いの細い道に入る。最

奥の集落、日浦の学校跡地の横から狭い道をさらに車を取り入れて、約五〇〇mほど林道を入ったところに車を停める。

歩き始めると卯の花があちこちに見られ、まだ鳴き声の下手なウグイスの声もたしかに聞こえた。長い林道歩きで高度も次第に上がっていく。途中の広く伐採された眺めの良いところからは、津和野の十種ヶ峰や青野山が手に取るように見えた。歩き始めて約一時間、一〇時二〇分登山口に到着。西さんはそのまま登山口を登るが、男四人は一〇〇mほど先にある水場へ。自然林の山あいからの水は軟水でやわらかくて美味しい。

登山口に戻らずに、水場からそのままスギの植林地の中を、登山道と合流する角度に直登する。数分の登りで稜線の登山道と合流すると、先を行く西さんの姿が見えた。枯れ葉の敷道を登りつめると小ピークである。二、三本の立ち木に吊された銘板があり「三子山南峰」と彫り込まれているが、振り返って見上げないとその文字は読めない。時刻は一時〇〇分である。

そそくさと通過し、短い下りに入る。南峰から約一〇分、平らな稜線から急斜面を登りかえすと三子山中央峰である。七九、七m、二等三角点があり、比較的きれいな花崗岩であった。JAC東九州支部のペナントを真ん中に記念の写真撮影。そ

の後、例のストック突き合わせての山頂ゴールをすませて、さらに稜線を北に進む。登山口



(三子山にて)

からずつと稜線の左手(西側)はヒノキの植林地であったが、ここから先はナラやカエデ、ブ

ナなどの素晴らしい天然林に変わる。

約一〇分で北峯に着く。岩も崖もない里山の稜線で、一人の登山者と逢ったきりだ。この時季にはほとんど登る者はない様子だ。北峰からさらに先へ進む。少し下って緩いアップダウンを一〇分ほどで露岩の多いピークに着く。ここが展望台となっている。広島県との県境方面の山々が、空気遠近法で見えるような稜線の重なりである。この時季特有の線のかすみ、低山の奥行きである。初夏の独特の色合いが漂うようせある。太陽が直に迫ってくる。

昼食休憩を終え、一二時二〇分、来た道を引き返す。登山口には午後一時一〇分に着き、長い林道下りで二時一〇分には車のところに帰り着いた。

このあと早めに日原の街に下りたので、温泉、今宵の野営場探しである。まず益田市の道の駅まで行き食料の調達。さらに尋ね聞いて古賀町柿木（かきのき）村の温泉センターに入る。硫黄泉だったが、山の汗を洗い落としてそれなりにさっぱりした。

翌日の山は安蔵寺山なので、出来るだけ近くで野営に適當な場所を探すととなる。稜線の峠の付近にマトをしぼり、棚田を抜けて滑峠（ぬめっとう）へと上っていく。案内板で学校跡地にキャンプ施設があることを

見ていた私たち一台が、峠を下って走ってみた。

谷の吐き合いに小さな集落があり、その横の溪流沿いにキャンプ施設があった。左鏡（さあぶみ）の上横道というところで、シーズン前だが、管理を任せられている集落の人に特に断って一夜を借りることにした。峠より一五分である。東屋に陣取り早めの夕食をすませた。河鹿の声を聞きながら心地よい爆睡に落ちる。

翌朝急に予定変更で、三時に起床コールである。真つ暗な中、朝食の準備などにかかっていると、メンバーの一名が体調不良を訴える。車で送る帰宅組と登頂組と、二組に分かれて行動開始しかけたが、やはり全員でそろって帰途につくことにした。午前四時、往路をそのまま復路にしてとばし、九時半には大分に帰り着いた。遠路ご苦労様でした。

参加者：安藤、飯田、佐藤、中野、西



私の無名山ガイドブック26

飯田勝之

鶴見北尾根の脇道

(その3)

「兎落し尾根ルート」

塚原越は狸峠とともに、別府市の明礬と塚原高原とを結ぶ、鶴見岳北尾根にある古くからの峠である。塚原越という名は、明礬の人々が呼んだ名に違いない。塚原の人々は明礬越あるいは明礬峠などと呼んでいたのかもしれないが、その記録等は知らない。塚原越から明礬に下る道は、峠から直に兎落シといわれる、その名の通り兎すら落ちてしまうような急な道を下って、昔の鍋山硫黄鉱業所跡を通過して明礬に出るのと、北に尾根道を迂回して狸峠から明礬へ下ると二つあった。

近年このほかに、峠の東側にある支尾根を伝って鍋山の谷に通じる道ができて、知る人ぞ知る道となっている。今回はこのルートを通ってみよう。このルートは下から登る場合は、兎落シルートからの分岐点が分かりにくいので、最初は下りに使って道を覚える方が無難である。今年一月のある日、早朝のみぞれまじりの雨が上がった午前

九時過ぎ、にわかになんて広かった青空をみて、急に思いついてこのルートを歩くことにした。鍋山探鉱所跡の車止めまで行き、人影のない鍋山の湯を横

(鍋山の湯)



目で見て谷を登っていった。途中で、尾根ルートに入る目印を見

て、そのまま谷を登っていく。兎落シの谷は、不安定な足下に注意しながら下るよりも、一歩登る方が険しい山登りを実感できるし、木々の植生を見ながら登る楽しみも深い。

登りつめてアセビの木立を抜けて塚原越の裸地に出ると、いきなり猛烈な風の歓迎である。北西方向から吹き付ける風は容赦なく、頬に当たる冷たい風は思わず尻込みする。見上げる空はまっ青。真つ正面から吹き付ける風に立ち向かうようにして広い道を登り、伽藍岳の山頂まで行くが、終始吹き続ける風に負けて、山頂で憩う気分すら失せて早々に退散した。塚原越から荒れた車道を内山に向けて進むと風は一層強い。伽藍岳に至る道よりもっと風は強い。

私は十数年前の冬のある日、扇山から内山に登りこの峠に下りたことがある。その時も猛烈な風でこの稜線の冬の怖さを知ったことがある。その時は終日雪空で、内山から下る急勾配の道に降り積もった雪に難渋したがそれよりも、峠に下りた時に吹きつける風と吹雪の怖さに身をちぢませた。

尋常な風ではなかったのだ。それこそ吹き飛ばされそうと言う表現そのものであった。身を低くして進んだものだ。さらにその時に、頬に当たる風のある種の痛さに吹雪と違うのを感じ

たのである。口の中に入った何かの異物、それが塚原の採鉱所跡の裸地から舞い上がる砂であることが分かったのだ。

まっ青に晴れ上がったこの日も、吹き付ける北西の風に、ピリッピリッと頬が痛いのはやはり砂まじりの風のせいだった。

その風にあおられながら塚原越の分岐から内山の方に二〇〇mほど進んだ縦走路に、わずかにそれと分かる踏み跡が東に向けて分かれている。木の枝に点々と目印のテープもある。木立にはいると不思議なほど風が収まる。

広いほぼ平らな広い稜線上で、目印を頼りに踏み跡をたどると、東にせり出した山腹を巻き気味に下りはじめ、やがて南東方向に向きを変えて急斜面を直に下る道となる。木の枝や幹につかまらなげら下っていくと急な下りは数分で終わり、次第に傾斜が緩くなつて、東に向きを変えたらほぼ平らな稜線になる。

コナラやカエデ、シデ、リュウブなどの木立に覆われた稜線はまっすぐで、さながら山の散歩道。夏は青い木漏れ日の中、秋から冬にかけては明るい日だ

まりとなり、一休みするにはもってこいのところである。穏やかな日射しの中に腰を下ろすと、



塚原越に吹き荒れている風が嘘のようにである。

平らな稜線は少し行くと、向きを北東に変えながら下り始める。やがて右側はヒノキの植林地、左側はシロダモやアオキなど常緑樹の多い天然林となる。

下るほどに痩せ尾根状になり、どんどん高度を下げていく。平らな稜線から二〇分あまりの下りで谷間が迫ってきて、やがて兎落シルトと合流する。あとが谷間の道を下つていけば、十五分あまり下ると鍋山の湯である。登りに横目で見えて通った露天風呂につかる。休日などはいつも、入れ替わり立ち替わり入浴者が訪れる湯であるが、珍しくこの時には人影がなかった。モズの声やせせらぎの音を聞きながら、大自然に囲まれて野趣あふれる露天風呂につかれるのは、筆舌につくせないものがある。

地形図：25, 000分の1
別府西部

参考コースタイム：車止め（二五分）〜鍋山の湯（二〇分）〜尾根ルート分岐（七〇分）〜塚原越（三〇分）〜平らな稜線（二〇分）〜兎落シルト合流（一五分）〜鍋山の湯

伽藍山



今西錦司 ⑦

西 孝子

いいちこさん

いいちこさん、電報で おどろいたか。しかし無事ネパールから帰ってきておめでとう。あなたも歳のことを考えて、もうそろそろ冒険は止めたほうがよいかもしれぬ。しかし目の前にエベレストやローチェやマカルーを見てきたというから羨ましいかぎりだ。記憶はつねに更新せねばならない古い記憶はつねに消えてゆく。ぼくもサマに十日ほどいてゼツストトリームの煙をあげているマナスルを見て暮らした経験がある。しかしもう十年以上まえのことで色あせてしまった。こういうと自重を促す老婆心と、記憶をたえず更新せよというそのかしのどちらがはたして多くの本心なのだろうか。この矛盾の解決はご本人にまかすしか仕方のないことを、誰よりもぼくはよく知っているはずである。とにかく無事にかえってきてなによりでした。お互いに生きてさえいればまた会えるから来年の春の一五〇〇登頂記念祝賀会（四月二日）でお目にかかるのを楽しみにしています
一九八五年一月二五日

これは、ネパールのホテルよりアイランドピークへ出発する前、葉書を出し、帰ってから報告しなかったのです。「ヘンマツ」の電報をいただき、すぐにお宅に電話した時、お妹様の故四出井鶴子様が「兄は眠っています。電報を打つと驚くと言ったのです。」と返事を受けました。

常にリーダーとして私を見つめていたことの有り難さを生涯忘れることはありません。この手紙をいただいてからの、ネパールの旅は「注意力」この言葉を思い、一歩ずつシンチョウに行動しています。文はそのままお知らせします。

「いいちこさん」これは三和酒造の焼酎を送った時に意味を聞かれ「よい」と「ベリーグッツ」と返事したら、こう呼ばれる（あだ名）ようになりました。
(マナスル)



お知らせ

蔚山支部との 交流登山

昨年一〇月に韓国山岳会の蔚山支部が自分を訪れました。その時に東九州支部との交流会がもたれましたが、これを機会に今後定期的に交歓登山を実施することを誓い合いました。去る五月三日、別府杉の井ホテルにて、来日した蔚山支部の代表者との打ち合わせで、おおむね次のような日程で第一回交流登山会が、大分で実施されることとなりました。

日程は次の通りとなっています。

- 一 九月二四日(月) 福岡着に到着し、二六日(水) 福岡より帰国する
- 二 九月二四日(月) 交流会及び懇親会
場所：九重町筋湯温泉
「八丁原ヴェホテル」
会費：八・四〇〇円(二泊二食)(弁当代、酒代別)
- 三 九月二五日(火) 久住登山
宿泊：法華院温泉
費用：八・四〇〇円(二泊二食)(弁当七〇〇円)
- 四 九月二六日(水) 大船山登山(下山後福岡へ)

まだ大まかな日程しか蔚山支部よりの連絡は来ていませんので、詳細が決まりましたら皆さんにお知らせします。

国際交流の場であるとともに、隣国韓国の山の仲間との交流です。出来るだけ参加して下さい。三日間通しで参加できなくても、その中の一日だけでも、二日でも参加できる方は参加して下さい。あらかじめ予定しておき、どの日に参加できるかについて、事務局にお知らせ下さい。

◎第五回青少年体験登山大会は八月二〇日に実施へ

当初七月二三日に実施を予定でし、雨のために延期しました第五回青少年体験登山大会は、次の日程で変更実施することとなりました。

- 一、日時 八月二〇日(日) 午前七時大分駅前集合
- 二、場所 久住山(牧ノ戸峠から往復)
- 三、行程 七・〇〇バスにて大分駅前発
九・〇〇牧ノ戸峠出発
久住山一五・〇〇牧ノ戸峠着
一七・〇〇バスにて大分駅前着予定
- 四、参加費

大学生以下：一、〇〇〇円
その他：三、〇〇〇円

※ ほか前回の通り。

※ 会員・会友の皆さんは、一人一名ずつ参加者を誘って(出来れば子供、しかし子供でなくても良いです)、是非参加して下さい。

支部会費の納入について

支部会費(年一、〇〇〇円)の納入がまだお済みでない方。同封の郵便振り込みにて早急にお送り下さい。

全国支部懇談会のお知らせ

今年の全国支部懇談会は福井県で実施されることになっています。参加申し込みを七月末までに支部事務局までお願いいたします。

- 一、日時 平成一八年一〇月七日(土)～九日(月)
- 二、日程及び場所
- ◎懇談会(七日) 福井県吉田郡永平寺町志比五一一五
- ◎山行(八日) 永平寺より大仏寺山(芦原温泉泊)

◎観光(九日) 芦原温泉～滝谷寺～東尋坊～芦原温泉駅

※ 山行だけの参加もかまいません。

八月月例山行のご案内

- ・月 日：八月六日(日)
- ・目的地：虎ガ峰(1200m)
(熊本県阿蘇山)
寅(とら)の山旅
- ・出 発：午前五時サニー出発
- ・現地集合：阿蘇仙酔狭 午前七時
- ・岩峰登りなので、現地状況、天候などでその場で到着地を決めます。

九月月例山行のご案内

- ・月 日：九月一〇日(日)
- ・目的地：兔巾岳(頭巾岳) (1400m)
(宮崎県日之影町) 卯(う)の山旅
- ・出 発：サニー午前五時発
- ・木浦午前七時待ち合わせ

十月月例山行のご案内

- ・月 日：一〇月一四日(土)～一五日(日)

- ・目的地：竜峰山(517.2m)
竜ガ峰(517.8m)
(熊本県八代市) 辰(たつ)の山旅
- ・出 発：サニー午前三時発
- ・ついでに翌日は、同じ八代市にある八峰山(574.3m)などを計画しています。

十一月月例山行のご案内

- ・月 日：十一月十九日(日)
- ・目的地：蛇谷山(谷ガ迫山) (389.5m)
(国東市武蔵町) 巳(み)の山旅
- ・出 発：サニー午前六時発

後記

○ 由布岳でミヤマキリシマを見ようと、十数年ぶりに塚原側の砂防ダムから登りました。

○ 最近ほとんど人の通った気配の感じない道ですが、美しい樹林の中には昔のままのジグザグ道がすっかり残っていました。

○ 驚いたのは標高が高くなり、植生がノリウツギやミヤマキリシマに変わってくるところあたりの変わり様です。

○ 昔の道は完全に大崩の中に

- 呑み込まれてなくなってしまうのです。
- ここ数十年の間に、大崩の東の縁は五〇m以上はえぐり取られて後退してしまっているのです。
- 白野の上部、西峰の肩付近のミヤマキリシマの原は、大半がもうそう遠くないうちに大崩に呑み込まれて、なくなってしまうのではないかと思われます。
- 近年の中高年の登山ブームは、目を見張るものを感じますネ。何処の山も元気な中高年でいっぱいです。
- 昭和四〇年代から五〇年代のように、何処の山も閑散としていて、寂しいくらいであったのから比べれば喜んで良いものかも？
- でも、見れば中高年ばかりで、昔のように山に若者の顔が見えないのが寂しい。
- 山は今、人がいっぱい。ちよつと名の知れた山なら、たいてい人の姿が見られるこのごろです。
- そんな中、このごろ気になっってしまうのが、山道が荒れていく様子です。オールドコースが何処も心配されていますが・・・
- 人が通れば踏み跡が残り、草は生えず、雨が降れば道は川となり土や小石が流され、登山道は沢やガレ場が変わっていく・・・

○ 昭和三〇年代の写真を見れば、沓掛山から久住に向かう草つきの稜線に一筋の細い踏み跡が続いています。今その当時の雰囲気を探すのも無理ですが・・・

○ 自然保護と言いつながら、山登りするのは自然破壊だ！と言うひとがいました。同感ですが、でも山には登りたい！

(K・I)

日本山岳会東九州支部報 第34号

2006年(平成18年)7月25日(火)

発行者 梅木 秀徳
 編集者 飯田 勝之
 発行所 〒870-0021
 大分市府内町1-3-16
 サニースポーツ内 西 孝子方
 TEL・FAX 097-532-0926
 題字 佐藤正八

| 平成17年度会計決算報告書 | | | (単位: 円) | | |
|---------------|---------|---------|-----------|---------|---------|
| 収入の部 | | | 支出の部 | | |
| 目 | 予算額 | 決算額 | 目 | 予算額 | 決算額 |
| 繰越金 | 118,740 | 118,740 | 事務局費 | 200,000 | 199,955 |
| 会費収入 | 104,000 | 72,000 | 事務消耗品費 | 27,000 | 51,405 |
| 会員(30人) | | 30,000 | 事務局費 | 10,000 | 10,000 |
| 会友(42人) | | 42,000 | 会場費 | 15,000 | 14,270 |
| 助成金 | 150,000 | 145,000 | 会報費 | 28,000 | 28,000 |
| 内訳 | | | 通信費 | 120,000 | 96,280 |
| 前期(47人) | | 117,500 | 雑費 | 20,000 | 30,869 |
| 後期(11人) | | 27,500 | 予備費 | 148,740 | 12,540 |
| 利息 | | 326 | (百周年記念行事) | | |
| 合 計 | 368,740 | 336,066 | 合 計 | 368,740 | 243,364 |

◎ (収入総額) 336,066円 - (支出総額) 243,364円 = (次年度繰越金) 92,702円

◎ 財産目録(平成18年3月31日現在)

※ 大分信用金庫 普通預金口座 N01042352 92,702円
 ※ 大分信用金庫 定期預金 残高(額面) 1,000,000円
 合 計 1,092,702円

平成17年度会計監査報告

平成17年度会計決算について、収入、支出、現金出納帳、領収書などの関係書類、預金通帳を監査した結果、各書類とも正確に整理され、適正な執行であったと認められました。

平成18年4月14日

監 事 安 藤 幹 印
 甲 斐 一 郎 印

